

このままでは暮らせぬ



発行所
三池炭鉱労組
大牟田市不知火町2
電話 33033番
33034番
編集人 山下 開
半年間600円 送料共

CO裁判の準備近く整なう

かねて方針として決定している「CO・遺族」の損害賠償請求裁判」を起す準備は、三池労組の努力によって着々と進んでいる。

何しろ「おたのしい救済」のほかにCO患者と犠牲者遺族を結集しての、文字通りの統一裁判となるため、当然横たわっている幾多の問題点を一つ一つ克服しながらの準備作業であるが、やがて提訴にこぎつける基礎は固まった。

は許せんが、すでに二万円以上の回答をさそぐ出されてくる。何といつても回答額の最高は鶴川精神サトリウム(医労協)の三万二千五百円で、要求の最大は日本郵船労組(総評所属、組合員三千五百人。平均年令三十四才で、現行平均賃金が基準内八万七千円)の六万六千四百円。組合では、「二万円以内では、賃上げ要求のうちは入りません」といっている。

「第四十四回大牟田地区統一メーデー」は、五月一日の当日例年になり、午前十時から梅林公園で開催されるが、田中自民党内閣が国民無視・独占資本本位の政策を強行する中で開かれるメーデーだけに、実行委員会としても「今年こそは真に闘うメーデーとして盛り上げなければ」と、かつてない決意で準備をすすめている。

今年メーデーのきわだった性格は、「大幅賃上げ獲得、全国一律最低賃金制の確立」「週休二日制確立、労働時間短縮、首切り合理化粉砕」、あるいは「安部条約廃棄、核も基地もない沖縄の実現」「和平協定完全実施、インドシナ復興支援」「軍国主義復活阻止、憲法改悪反対」といったもののほかに、「スト権奪還、労働基本権の確立」「物価値上げ反対、低賃金公営住宅の建設」が盛り込まれている。

炭労要求の満額獲得 春闘

許せぬ田中自民内閣

天井知らずの物価値上がり

七三年春闘は、十七日の「年金統一スト」に対する全労働者の気組みが示しているように、かつてない激しさを前進している。

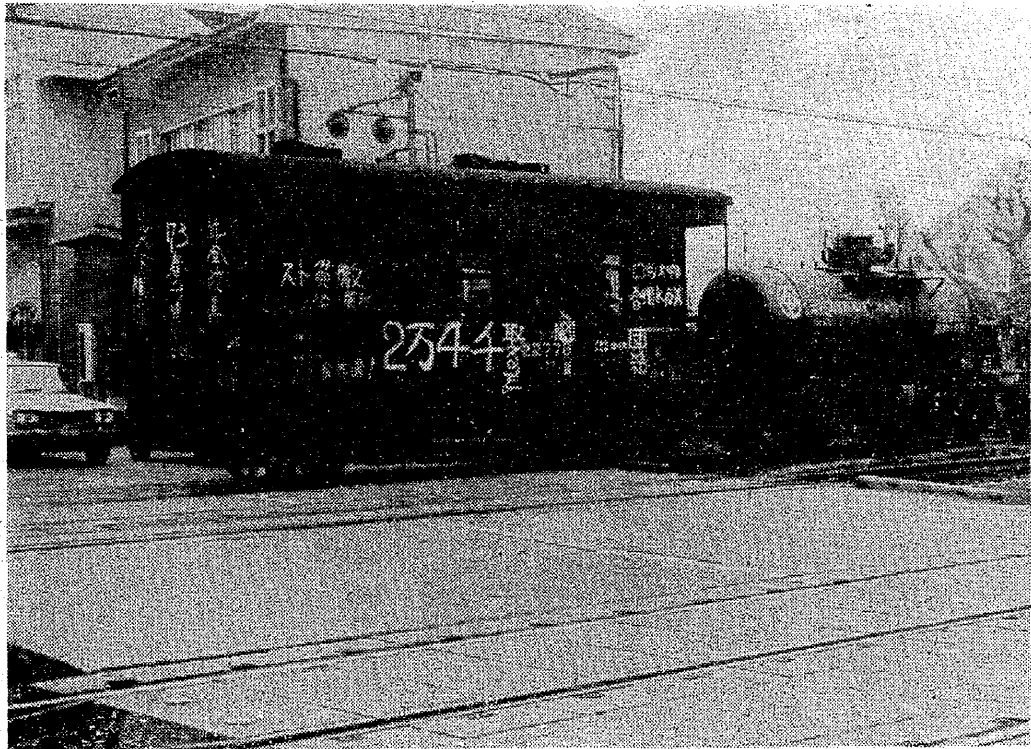
その原因は、田中内閣にかわった途端スタートした天井知らずの物価値上がりによるが、このままの歩みを許すならば、それにくてさへ苦しい炭鉱労働者の暮らしが果たしてどうなるか、職場を家庭を暗い不安が包んでいる。何なんでも、せめて炭労要求二万五千円は、満額獲得を決意しなければならぬ。もはや田中内閣

炭労、石炭分
離反対闘争へ
炭労は三井鉱山の石炭部門の分離(港務所合併)を前号参照のと問題について、資本の石炭部門からの撤退、人へらしや労働条件の切り下げを意味するものと内部体制を確立する。

して、当面次のようなことを行なうことを決定した。
第一に、国交を通じてきつに資本の問題を明らかにすること。
第二に、対政府行動を展開すること。
第三に、闘いを推進するための内部体制を確立する。

「三〇万人が年金スト突入」
この十七日、「安心して暮らせる老後」の要求を掲げての年金ストには、五三三三三三〇万円が参加。

「真に闘う意志を結集」
中央に呼応し、大牟田のメーデー
「大牟田のメーデー」は、五月一日の当日例年になり、午前十時から梅林公園で開催されるが、田中自民党内閣が国民無視・独占資本本位の政策を強行する中で開かれるメーデーだけに、実行委員会としても「今年こそは真に闘うメーデーとして盛り上げなければ」と、かつてない決意で準備をすすめている。



国鉄労働者の強い春闘要求を掲げながら、走る貨車。激しい筆跡の文字に、国鉄労働者のたぎる怒りを見る。春闘は、いよいよこれからだ!

三川で打ち続く犠牲者

久富さん(下請工)が感電死

明らかに保安サボによる殺人

この十二日、三川(岡田二郎鉱長)の坑底で発生した災害のため、三池建設(三井建設の下請)の掘進工・久富又雄さん(四十七才。荒尾市宮内社宅八十棟居住)が犠牲となった。ほとんども即死の状態だったが、三池労組はただちにピラで事実を伝え、三井鉱山に対し強く抗議すると同時に、故久富さんの逝去に対し心から哀悼の意を表し、冥福を祈った。

災害は、その日の午後八時三十分ごろ三川鉱の坑底、西五十脚東機運FA充填坑道(四五〇メートル坑道)で発生した。同刻、久富さんは同坑道拡大のため支柱の回収作業に当たっていたが、サビで錆びて離れな

いた。ページ(大木を張るための用材)のボルトをはずそうとしたが、サビで錆びて離れな

った。ページ(大木を張るための用材)のボルトをはずそうとしたが、サビで錆びて離れな

助先のYさんがそのボルトの頭をたたくこととした。

ところが足場がせまくてそれができず、作業台の上にいる久富さんが「それならば」と作業しやすいために移動しようと、トローリ線をまたごとしたとき右足の膝がトローリ線に触れ、またまたトローリ線を握っていた左手を通って一瞬二百五十ボルトの電通が久富さんの体を突き抜けたもので、感電による死にだった。

高電圧の流れるトローリ線に、感電防護の処置さえほどこされていたら、絶対に起こり得ない災害だった。度重なる会社の保安サボに対し、職場は激しい怒りをかみしめている。

会社側は、またしても「生産第一主義」をさらけ出した。事実、梓足を入れ、ボタを幾回となく積み、アナタリ作業などに追いまくられた。その日の久富さんの体は汗にまみれていた。それが、いっそう感電の危険性を大きくして、たもので、依然とした保安監視、生産第一主義を押し通す三井鉱山に、三池労組は二十四時間の年金ストの一指標に掲げて強く抗議した。